

## 施設介護実習を終えて

家政科生活福祉専攻

青木君代

京都短期大学生生活福祉科介護福祉専攻は、平成9年4月より介護福祉士養成施設として、厚生省の認可を得て定員40名で発足し、京都北部で唯一の養成校となりました。介護福祉士養成にあたって、実習はウェイトの高いものとなっており、特に学外実習の施設介護実習は450時間(10単位)で、実習施設の認可に於いても開設3年以上となっており、近隣に於いて開設当初該当する施設がなく、遠く丹後町、京北町、亀岡市、丹波町、但東町、舞鶴市等の諸施設の承諾を得ました。その内訳は16の施設が特別養護老人ホームで2施設が身体障害者療護施設です。

実習先が遠方の上交通の便が悪い為、実習前後の送迎は学校がバスや自動車を用意し実施しました。又実習期間中全員宿泊を前提としています。

実習施設への巡回指導は週2回と義務づけられており、教員全員がその任に当たります。

又、学生の配置メンバーに於いても、重複しないようにしたり、可能な限り複数の施設実習になるよう配慮し、教員全員の合意の基に決定しております。

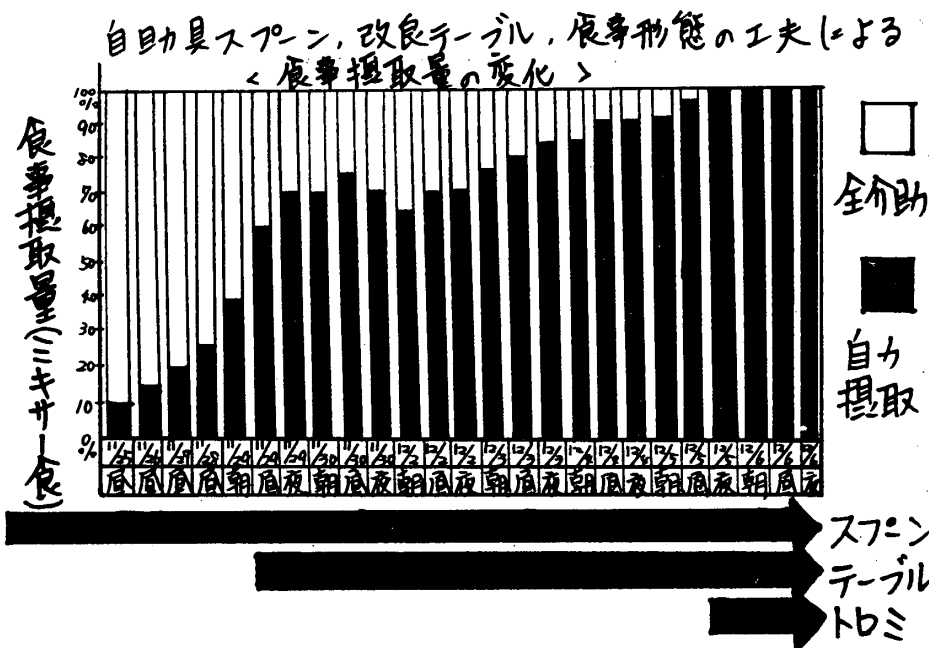
巡回指導に於いて、学生にきめ細かな指導と共に、施設の実習担当者との情報交換や、中間、最終カンファレンスにも参加し、学生の実習状況のチェックと諸問題の解決や今後の実習の方向づけとしました。尚巡回教員間での情報交換は訪問記録は勿論のこと、口頭等綿密に行い、情報の共有をし、教員相互の認識と指導の統一を図りました。

【施設介護実習】に於いては厚生省が示している【学生の講義、演習、学校内実習の進捗に応じて3段階に分けて実習させることが望ましい】とされており、当校では1段階で2週間、2、3段階で各4週間としています。

各段階の実習前に1日を事前学習日とし、実習終了後に2日間を報告会とします。いずれも学生の出席は勿論の事、教員も全員参加し意見交換や指導に当たります。

第3段階実習終了後の報告会に実習施設の指導者へ出席を依頼したところ、少しずつではありますが増えていく傾向にあります。今回も一部の施設の指導者の出席があり、現場の指導者としての貴重な意見を頂くことが出来、発表する学生に於いても、緊張感がある反面、指導者との共有の場を持つことが出来、大きな喜びとなっていました。

施設懇談会は例年5月に実施し、施設側より施設長、実習担当者の参加を頂き、学校側より、学長、事務長部長、教員でもって開催し、学生指導の方向性の統一や、施設側からの意見、注



文、批判点、反省すべき点等情報交換の場としました。毎回半数以上の施設の参加があり、昨年は17施設中12施設の出席がありました。

平成14年度の第3段階の報告会はさる12月21、22日の2日間にわたって実施しました。特に第3段階の実習目標は施設実習の総まとめとして位置付け、日常生活援助技術を高め、介護福祉士としての職業倫理、社会的役割、使命などについて考え、施設運営プログラムにも参加し、組織の一員としての責任とチームケアの重要性を自覚出来、処遇全般について理解すると共に、個別介護過程の展開をし、評価考察が出来ることとしました。

実習終了後10日間余り各学生は夜遅くまで報告会に向けてまとめをしました。この報告会には、1、2回生全員が出席することになっています。発表時間は1人10分としましたが、殆どの学生はオーバーし、質疑応答等にも堂々と答えており、中には20分位かかる学生もいました。発表内容は個別介護過程の展開とし、先ず担当利用者の情報収集、問題、ニーズの把握、目標の設定、介護計画（介護方法の選択）実施、結果、評価、考察、変更、修正といった一連の過程を体験学習したものでした。又発表するに当たり、反省点や考察に於いて、相当の時間を費やし、より介護過程全般の科学的裏付けを明確にし、より介護の理念、原則をしっかりと再認識し、専門職者としての学びを深める機会としました。

学生達はさまざまな障害をもつ利用者との関わりの中で、対人関係に於いて一番大切なコミュニケーションでつまづいた者、又情報収集が未熟で問題点が明確に出来ない者、又実施中に目標から外れ再度の目標を確認し直す者、担当利用者が2週間目に急変して亡くなられた者、風邪をひかれ当初の計画を止む無く変更修正した者、計画立案に時間がかかり過ぎ実施が遅くなり、利用者の反応が充分把握出来なかった者等、介護過程の中で多くの困難に直面し、悩み

苦しみながらも介護過程の展開の意義を認識することが出来ました。

又宿泊前提としている事により、生活面での学生間の助け合いや、実習全般にわたっての意見交換等により実習効果が高められたと言った面もありました。

今回の発表の中で学生が援助の目標としたのは、第1位が趣味活動の活用、第2位が自助具の活用、第3位リハビリの継続による残存能力の維持拡大を図るとなっており、その他コミュニケーション技術の活用、規律正しい生活を取り戻す為カレンダー、週間表の作成と活用といった内容でした。これらの援助内容がそれぞれの利用者の生活の質(QOL)を高めるものとなったり、又日常生活動作(ADL)の確立による社会参加への意欲の向上、趣味活動を通して生きる喜び、楽しみによる自己実現等介護の目標に近づけられたと考えます。

これらの目標達成に於いては、利用者の主体性を尊重した働きかけを主眼に置いたものであり、利用者と共に喜びを共有出来ることの幸福を実感するものになったと考えます。そしてこれらの喜びは学生の心の中に大きな感動となり、しっかりと根づくものと信じています。

第一段階実習を2ヶ月後に控えた一回生は、真剣な表情で報告会を聞き、そのレポートの中に「学んだことを忘れず未来に繋げていきたい」、とか「報告会を聞くまでは、安易に考えていたが、考え直す機会となり、辛くても最後まで頑張り絶対にやり抜いて、必ず介護福祉になりたいと強く思った」等学びと共に感想を書いていました。この2日間の報告会は、1回生の実習に対する心構えが出来る良い機会となりました。

介護基礎教育が科学的思考を基盤とした介護実践力であることから、この報告会を通じて、学生の実践を基に思考過程を分析することにより、少しずつではありますが、介護とは何か、介護の原則、理念を実践を通じて、実証することが出来たのではないかと考えます。又福祉保健医療全般に亘る広い視野とチームケアの一員としての、知識技術を身につけると共に豊かな心と人間性を持つことの重要性を学び取ったと考えます。

この学びを深めるに当たって、施設長様はじめ、施設指導員、寮母の方々、利用者の方々の



計り知れない暖かいご指導とご援助を戴いたことに対して心よりお礼申し上げます。本当に有り難うございました。

この報告を取り進む中で学生の介護に対する熱い情熱と強い誇り、意志を肌で感じたり又徹底的に物事を追求していくことにより、学生の無限に広がっていく思考力の柔軟性に改めて感動したり、又共通の認識の出来た時の喜び等、時間の経つのも忘れ、学生と共に多くの共感を得た事は、各学生の心の内面の充実に役割を果たしたのではないかと考えます。

そして、自分自身の持つ豊かさや力量、見識以上のものを学生にプレゼントすることは出来ないと言うことをしっかりと、心に留めて、学生と共に介護の道を研鑽していきたいと思えます。殆どの学生が実習最終日に利用者から、ありがとう、頑張っただね、ご苦労様でしたと涙ながらに言って戴いた、利用者の真心のこもったプレゼントを心の糧として、今持っている情熱を、理想に向かって主体的、創造的に行動するエネルギーに換え、今後の福祉社会に持ち続けて行って欲しいと願っています。

高齢社会の進む中で介護への期待は大きくなって行きます。より質の高い、そして人間性豊かな介護福祉士を育成するに当たり、養成校、実習現場、介護福祉士会の三者間でのそれぞれの立場からの観点を重視した共通の認識や理解が重要であり、その為の努力を惜しまず、何よりも社会の期待に応えるべく人材の育成に心血を注がねばならないと痛感しています。

そして施設実習に於ける実習担当者の研修や人権費用の面、又指導者としての身分の保障の確立等、国の政策の中で早急に取り組んで戴きたいと願います。又専門職能団体としての社会的な位置づけに向けての全国的な規模での系統だった卒後教育システム作りと教員養成充実を期待します。